

「もし君が〇〇だったら…」という発問はなぜNGなのかに寄せられたご意見等

(2019.10.21 文責：後藤)

A氏

朝食を摂りながら一気に拝読しました。大変読みやすいと思ったのが第一印象です。

学生に道德教育の指導法を講義していると、「自分だったら…」 「なぜ…」 の発問を使いたがります。

学生達は「自分だったらを考えさせるのが道德科の授業なのだから、どうしてそれを使ってはいけないのか」と食い下がってきます。「それを使うことによって子供を現実生活に引き戻し、ねらいとする価値への深い洞察が生まれなくなる」と話しています。(納得しているかどうかは判然としませんが…)

私の初任時代の教材研究のノートを見てみると、「あなただったら…」 という発問が用意されていました。安易に問いたい問いが「自分だったら…」 なのでしょう。活発な意見交換はされるでしょうが、方法論や受けをねらった発言が多くなります。

やはり先生がおっしゃるように「道德的価値の自覚」を促す授業が道德科の本質だと思います。「そうせずにはいられない心」を育てる道德科の授業を探究したいと思う今日この頃です。

B氏

共感させていただく点が多く、早速増し刷りして教員に配布いたしました。特に3ページ目については道德授業を行う上での極めて大切な心構えと捉え、下線を引いて強調させていただきました。

C氏

貴重な文章を読ませていただきました。ありがとうございます。道德の授業について考えさせられるよい機会となりました。

この度の〇〇教諭の授業案作成に対しての先生のご指導の過程をつぶさに拝見していて、道德授業は教材理解でほとんどが決まること、よい教材が子供の心を映し出すことを改めて学びました。

本日拝読した文章によって、道德授業では何を大事にしていったらよいかさがさらに分かり、本校の教員たちと話していきたいと思います。この資料は校内に増刷りして配布させていただきます。

貴重なご示唆をありがとうございます。

D氏

貴重な資料をご提示いただき、本当にありがとうございます。

「道德科を実生活の予行演習みたいな無駄なことに使うのは非常にもったいない話だと思う。」という部分、本当にその通りだと思いました。授業者にも、一般人にも、なかなかこの感覚が異なる方が多いようで、様々な見解の違いが出てきているのでしょうか……。

2017年に出版されたモラルジレンマ教材集が非常にヒットしているようです。東京ではあまり取り上げられることが少ないかもしれませんが、全国ではまだまだその勢力が大きいようです。

それはモラルジレンマ理論に傾倒している教師が多いというよりも、もしかしたら授業が活発に見えるところで求められているのかもしれない。

E氏

懐かしい2年前のNHK TVの「きみならどうする？はなぜいけないのか」の補訂原稿ですね。

そのもっと前(平成20年頃)のNHK TV「道德ドキュメント、きみならどうする」を思い出しました。当時、勤務校ではこのNHKのTV番組を年間指導計画に盛り込んでいましたが、実際の授業になると番組の冒頭にナビゲーターが「きみならどうする？」という投げかけを行っているのが大変邪魔

でした。カットして使おうという話になったことをまた思い出しました。まったく無用な、不要な投げかけでした。考えるのは子供自身ですのに、余計な方向に誘導するものでした。

また、先日ある市教研に呼ばれて行きました。「雨のバス停留所で」を活用して2年目の授業者がとてもがんばって授業を進めていましたが、教材理解が浅く、教材提示も甘かったため、子供への聞き返しを何度もしなければならぬことを余儀なくされていました。

授業者は苦しくなって、「〇〇君だったらどう？」という感じに陥ってしまいました。それは他に思い浮かぶ言葉が見つからなかったのだと思います。

展開の後段では、「きまりは何のために」ということについての考えを書いていました。

その後の協議会の指導講評で、「自分を見つめる時間を設けたい。」「きまりは何のためにあるのかと問題解決的にやろうとしたが、その後で、自らを振り返る学習がなければ道徳授業にならない」とお伝えしました。知的理解の高い子がワークシートに「これからは…」と書いていましたが…。

子供によっては、過去にとらわれている子もいますし、今の思いで精一杯の子もいます。

展開の後段でも一様に「きみならどうする？」、まして「これからどうする？」は思考の方向を限定してしまうばかりか、そのことを発言させたり書かせたりすることが道徳授業のMUSTになってしまったら…と思うと、大変なことだと思いました。

F氏

貴重な資料をお示しいただきありがとうございます。妻は現役です、先日校内授業研で「手品師」の授業をしました。先生がおっしゃるように教材分析の上、「自分だったら」という発問を使わずやりました。納得です。私は今の仕事（人権、同和教育）の中で同様の考えを目にしました。後程、お送りします。

G氏

過去に参観した授業で「あなたならどうする？」の発問が出るとつい興ざめしてしまったものでしたが、今はそれで済ますわけにはいきません。先生の原稿をよく理解し、指導・助言できるようにしていきます。

この発問が増えた時期と、「自分事として考える」という言葉が多く使われるようになった時期とが一致するのではないかと思います。

児童・生徒を教材の世界に引き込み、登場人物に自己を投影させることができれば、児童・生徒は学習の主体者として自ずから「自分事として」考えていることになるわけです。しかし、授業者が発問に行き詰まったり、児童の発言が途切れてしまったりしたときに、焦ったり心配になったりして、つい安易にこの「あなたならどうする？」を言うてしまうことが多いように感じます。

H氏

貴重な資料をどうもありがとうございました。この論文に接して、久方振りに、学ぼうという気になりました。感謝・合掌。

私は道徳の門外漢ですので、私のところに集まってくる若い教師達（教職経験5年未満）にこの資料を渡して、ワイワイ話し合ってもらいました。それをまとめたものを代わりに送りますので、これでお許しください。学校での道徳科理解の現状把握の一助になれば幸いです。（話題になったことを端的に伝えたい意図で、文章が生意気な表現になっていることをお許しください。）

★★…道徳科の授業では「理想的な発言をする」のに、授業が終わって教室を1歩出ると「真逆の行動をとる」子が多い。「内心も、表に出る行いも、何とかまっとうなものにしたい」と思う素朴な願いがこのような発問を誘発してきたと思う。

大人だって、「ごみのポイ捨てはいけない」と分かっているのに、ポイ捨てをする人は後を絶たな

い。だから、道徳授業は「こうしたらいい」という具体的な提案がなければ、この現象は理想の方向には転換しにくいと思う。

- ★★…道路を歩いているとき、自転車に道を譲ることが多い。「びよこんと頭を下げて謝意を表す人」、「当然のように通り過ぎていく人」がいる。無意識に思いやりの行動がとれるようにしたいと担任ならほとんどの人が思っている。AC JAPAN のようなことが当たり前のようにできるようになったら素晴らしいと思う。道徳科でどんな授業をしたらそれが可能になるのか知りたい。
- ★★…「子供の心を鮮明に映し出す」とは具体的にどのようなことか。経験の浅い私にはよくわからない。
- ★★…人間としての「道徳性」を養うのに、なぜ「オオカミ、小鳥、カボチャ・・・」を使わなければならないのか？所詮、架空（物語、作り事）の世界で、仮想空間（バーチャルの世界）の道徳性を「学びっこ」しているだけではないのか？
- ★★…なぜ「もし君が手品師だったらどうするか？」と子供の心をくすぐってはいけないのか？「それは…すればいいのだ」と私にも分かるように、具体的な例示・ご指導を願いたい。
- ★★…「何を目指して」「どのように」道徳科の授業をすると、子供は「このように変わるはずだ」と先生の授業展開のイメージをもう少し示していただきたい。私もまともな道徳科の授業をしたいといつも思っているのだ。
- ★★…確か、千葉大学の先生が昔「モラル・ジレンマ」のことを本で主張していたのを少し読んだ記憶がある。現在では、「ブレーキが故障している列車が走っている。このまま進めば3人轢いてしまう。ポイントを切り替えれば1人轢くだけで済む。さて、このまま進むべきか、ポイントを切り替えるべきか…とジレンマに落とし込むような指導が一部で話題になっている。どうしたものだろうか？
- ★★…「教材に結末がある方がよい」と「教材に結末がない方がよい」という相反するこの2つは、具体的にどのようなことなのかよく分からない。結末があれば「価値観の押し付け」、なければ「自由に考え、自分で価値づける」ということになるのではないか。どうもピンと来ない。AやBなどいろいろ考えるのではなく、Aだけで考えるというのはどんな理由によるのか。
- ★★…「自分ならどうするかを考える」と「登場人物になり切って考える」とに違いがあるのか？また、教材を物語として国語的に味わっている子供に、登場人物に自己を投影して、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めるように仕向けるには、具体的にどうすればいいのか？ 結局、「○○さんならどう考えるかな？」ということにならないか。

I氏

「自分ならどうするか」という問いは、その瞬間から子供は我に返り、損得を考えてしまうことが本当に恐ろしい問いだと改めて考えました。昔、手品師の「自分ならどうするか」という問いで「私が手品師なら子供に電話をして予定を変更する」などという方法論に進んでしまったという話を聞いたことがあります。

本時のねらいは何か、学習指導要領に基づいて考え、児童が価値の自覚を深めるのに最もびったりな発問を考えていくことが重要だと感じました。「この発問で良いか？」と悩んだ時は、何度も学習指導要領に戻って確かめることを私は心がけています。

J氏

頭の中が整理されたように感じました。生意気な言い方のようにですが、ほぼ私の考えに通じるものがありました。特に、末尾に近いところで「道徳授業で取り組むべき第一義は『道徳的価値についての理解（自覚）を深めること』このことを専一とすべきだと私は考える。そして、道徳的価値についての自覚を深めることと併せて、その価値実現の困難さについての自覚を深めることが大切である」と述べられてい

る点はまったく同感です。ありがとうございました。

K氏

私自身、道徳をきちんと勉強する前や少し勉強し始めた頃、このような発問をしていたような気がします。その方が、子供の本音が引き出せると思っていたからです。でも、それは大間違いだったと今は思います。逆に建前の意見が出たり、お調子者の子は（悪気があるわけではないけれど）話し合いを盛り上げるための発言をしたりしていたような節がありました。

人間は本音がなかなか言えないものです。仲の良い、信頼できる関係の中で、しかも言いたくて仕方ないときにしか言えないものです。特に、日本人には恥という文化があるので一層その傾向が強いと思います。人間の心の弱さなどは、なかなか言いにくいものだと思います。ましてや、他の子に自分とは違う考えを先に言われた後で、それでも自分の思いを言えるというのは相当勇気がいります。子供だけでなく、大人もです。大人の話し合いでさえ、なかなか自分の思いを素直に言えません。私自身もそうです。

子供の本音を聞きたい、本音を言わせたいというのは教師の思いです。子供たちは教材と向き合いながら、「僕はこう思う」「その気持ち分かる」と思いながら、自分を見つめたり、他の人の意見を聞いたりする、その方がずっと安心して本音で考え、考えを深められるのではないのでしょうか。「もし…」と聞かなくても、その子は自分の体験をもとに考えを述べます。子供の発言を聞いていると、その子の裏側が見えます。教材に自分を自然に投影していると感じます。その方がより本音に近い発言だと思います。

L氏

勤務校の自治体が採択している教科書の中に、結末のない教材がある。

実はつい先日、その教材で授業を行ったばかりだ。教材の内容は子供にとって身近であり、ふだんの友人関係の中でいつでも起こり得る、同じような経験をもつ児童がいるだろうと思える教材だった。教材を読み終えると、児童はめいめいに教科書の次のページをめくった。しかし、続きはない。「えー！終わり？」「気になる！」児童は口々につぶやいた。

教材を作成した編集委員会が期待したのは、「もし君ならどうする？」というオープンエンドの授業展開だったのだろう。

しかし、わたしは絶対にそうしなかった。どうすべきか分かっている児童にわざわざ答えを求める必要は無いし、決意を強要することになりかねないからだ。素直でかしこい児童ほど先生の喜ぶ答えを出そうと格好つけてしまう。もちろん「自分はできないかもしれない」と素直に発言する児童もいるだろうが。

こうした場合、次に展開しやすいのが「では、どうすればいいのだろう」という発問だ。しかしそうなると、何をするかという行動面に注目した「方法論」に話し合いが流れてしまうことが多く、その後の軌道修正が本当に難しくなる。

道徳の授業で大切なのは、登場人物が取った結論（できた時、できなかった時は教材それぞれだが）について、その時の心情を考えたり、話し合ったりする中で、人間理解や道徳的諸価値の理解を深めていくことである。結論のない教材だとそれができず、児童の思考はどこか浮わついたものになってしまうし、ねらいに直結した中心発問の設定も難しい。

実際、わたしはその授業で、「言うべきか、黙っているか」の登場人物の心理的葛藤についての話し合いの時間を多く設定した。話し合いの中で児童は自然と「正しいことをしようとする自分」「そうは思っているがなかなかできない自分」について、自分の思いを広げていた。

その後の中心発問の設定がしっくりしなかったので、すぐに自己の振り返りの時間に移ってしまった。

振り返りでは「悩む自分を『正しいことをしよう』とする自分に、もう一押しするには何が必要だと思うか」と発問した。苦しかった。児童は一生懸命に考えを書いていたが、何かしっくりこない授業になってしまい、児童に申し訳なく思っている。

これは全くの私見だが、「もし君ならどうする？」といった発問は教科化の流れの中でまるで「魔法のことば」のように扱われている気がする。道徳授業の充実はそんなことで図られるほど簡単ではない。わたしは一つ一つ授業実践を積み重ねる中で、児童がじっくりと自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深められる授業を目指したい。

M氏

① 道徳科の授業は子供が主人公に託して自己を語るもの

- ・「あなたはどう考えますか」と問われて、みんなの前で自分の考えを述べることは、とても勇気のあること、難しいこと。
- ・しかし、道徳科の授業は『登場人物に自己を映し、自由に屈託なく自分の思いをめぐらして』自分の考えを表現できる。
- ・だから、問題行動を繰り返す中学生も「道徳は好き」という子供が多い。
- ・『もし君が〇〇ならどうする？』と発問すれば、自分の考えをみんなの前で述べることになり『ピュアな思考活動は遮断されてしまう。そして、場の空気や教師の顔色、建前などを気にして考えたり、そうでない子供は正直なことを言って教師に叱られたりする羽目に陥ってしまう。それでは、せっかくの道徳の授業は台無しである。』 ←同感！

② 自分事として考える

- ・道徳科の授業は、発問に対する答えを国語科のように教材文から「読み取る」のではなく、もし自分が教材の主人公と同じようなことになったらどう思うかと、自分の体験を振り返り、『もし自分だったら…』と考えて、自分に答えるもの。難しく言うと、教材の主人公の心情を共感的にとらえ、主人公に自我関与して（自分事として）考えるのが道徳授業なので、あえて『もし君が〇〇ならどうする？』と問わなくても、子供たちはどの発問にも『もし自分が〇〇ならどうするか』を考えている。
- ・しかし、教材文から読み取った答えしか発言しない子供（学級の）には、『もし君が〇〇ならどうする？』と切り返すことや、補助発問をすることが必要なので、『もし君が〇〇ならどうする？』という発問は全くのNG』とはいえない。
- ・『資料の読み取りに終始するだけのダメな授業は、授業者の指導力が未熟な（発展途上の）ため』である。

N氏

本市に異動して初めて参観した市教研の研究授業のことです。

（発問構成は忘れてしまいましたが）教材提示後5分くらいで教材から離れ、「もし、自分だったらこういう場合はどうする？」「もし、自分が体育館を自由に使っていよいよと言われたらどうする？」などの発問について子供達は班で話し合いをしていました。教材からすぐ離れているので、子供達は今までの自分の経験からしか考えが述べられず、せっかくの「うばわれた自由」という教材のよさが生かされていませんでした。本時のねらいもよく分からないもので、しかも教材の主題が子供達によく伝わらないままでの話し合いだったので、とても薄い、深まらない授業になってしまっていました。

前任校で同じ教材で授業をした時のことを思い出し、かなり衝撃を受けました。やはり、じっくりと教材にひたらせることが大切だと実感しました。

O氏

道徳授業では道徳的価値の理解が大切なことと感じています。

「自分ならどうするか」のような発問はナンセンスだと私も思います。

それは、道徳的価値の中には、なかなか価値が実現できない人間の弱さがあることも確かなことであ

り、自分ならどうするかを考えようとすると、いわゆる優等生のような、人の目を気にするような答えが返ってくるだけで、道徳で大切にしている自分の心を見つめ、自分を深く考えることをストップさせてしまうと思うからです。

ただ、私自身もこの発問をつい使ってしまうあやふやさをもっています。低学年から高学年になるにしたがい、教材に登場する人物は動物などから、人間、偉人など変わっていきます。特に、偉人のお話に関しては、幼いころの様子や苦労がクローズアップされることもあるため、どうしても、自分の生き方と比べてみてほしいなという気持ちが出てきてしまいます。

また、自己のふり返りを書かせたりすると、「自分と比べ〜」、「自分なら〜」という文言で書き出す児童もいるように、高学年になると、自分と重ね、自分事として考えるのはごく自然なことのようにも感じてしまい、つい安易にこうした発問をしてしまうという難しさも感じているところです。

教材に関して、先生がおすすめの教材はどれもよいものが多く、中心発問を押さえられれば、授業としてよい授業が行えたという手応えを感じるようになってきています。

しかし、普段の授業で、いわゆる教科書を使用して進めていくなかで、よい教材ばかりではないのも確かです。また、これは言い訳ですが、他教科の授業準備もありますし、教科書以外からよい教材を選び、年間35本すべての内容項目を網羅する指導計画を立てることにはそうとう苦労します。教科書の、あまりおもしろくない教材で、発問もうまく構成できないと安易に、「自分ならどうするか」と子供たちに丸投げし、なんとなく考えさせるような発問となる授業になっているのかなと感じています。教材選びや発問に苦労している先生方も多いのではないかと感じています。

だからこそ、年に数回の授業研究を大切にしたいものだなと改めて感じました。